

参考：「地域大国比較 Round Tableのための司会者のメモ」 毛里和子

1. 北海道大学スラブ研究センターの新学術領域研究「ユーラシア地域大国の比較研究」のwebによれば、本プログラムは二つの中心的コンセプトをもっている。一つは、その「半周縁性」のゆえに中国・ロシア・インドは国際秩序、米国的普遍的価値への挑戦者である、もう一つは、上記地域大国は、帝国としての歴史、対米関係、エネルギー問題など類似の課題をもち、それへの対処に共通性と違いが観察できる、というものである。その上で、プログラムが解明すべき問題は、webによれば、*3 地域大国（トルコを含めて4 地域大国）が発展・定着できる条件は何か？ それを阻むものはなにか、*世界構造理解のために地域大国という新中間項を設定することで、グローバル課題への新視点を創り出すこと、となっている。

2. 本ラウンド・テーブルは3つの地域大国の「政治比較」が目的だが、以下二つの問題から迫ってみたい。まず【地域大国】である。地域大国として現代中国・ロシア・インドを念頭におく（トルコは念頭に入らない）。それらを分析するための方法・手法として、地域大国比較はどの程度、どの分野で、有用かどうか、を考えたい。ラウンド・テーブル参加者にもぜひ考えてほしい。*地域大国とはなにか、その固有な意味はなにか、地域大国として括ることにどのような意味があるのか。とりあえず想定できるのは、一つは地域形成、地域内・地域間衝突の重要なアクターとしての意味がある。もう一つは、経済戦略・発展のモデル、価値の先導者としての意味がある。しかし、全般的には、「地域大国」として括ることの研究上の意味はいま一つ判然としない。

3. 次に【比較】を吟味しよう。なんのために比較をするのか、比較で得られる効用はなにか？ 何を比較すればもっとも目的合理的か？

そもそも比較にはまったく方向が異なる二つの効用がある。*毛里和子「社会主義の変容——中国とロシア」（萩原編『講座現代アジア3 民主化と経済発展』1994年、東京大学出版会）は、「何から何への移行、変容なのか」という問いを立てて、中国とロシアを比較した。その結果、党国家体制、官僚制、農業集団化という三つの分野の比較検討を通じて、中ロ社会主義の違いの由来を考察、そのことによって「移行」の内容が異なるとした。この場合、個性の解明、その由来の解明が比較の効用である。

他方、毛里のもう一つの比較の試み——21世紀 COE「現代アジア学の創生」は、反対に、東アジアの Asia-ness の抽出を目的とし、具体的には、政府党体制、国家-社会の浸潤体制、

外来法と固有法の共生などをアジアの一般性として導き出した。この場合、比較は、一般性、普遍性を抽出するための手法、ツールであり、普遍的原理の抽出が比較の効用といえる。これに近い立場に立った比較が、絵所秀紀がアジアの開発戦略を検討した「インド・モデルから韓国モデルへ」である（前掲、萩原編『民主化と経済発展』1994年）。

4. このように、社会科学で比較には二つの相反する効用がある。一つは主要対象をより鮮明に浮かび上がらせることであり、アレック・ノーブが言うように、「どこまでがロシアという事実由来のものなのか、どこまでが共産主義支配のせいなのだろうか。ロシアにおける共産党の支配はどの程度ロシア的であるのか」を解き明かすことである（アレック・ノーブ『スターリンからブレジネフへ——ソヴェト現代史』刀水書房、1983年）。同じことが中国についても言えよう。

個別化を追求することで得られた最近の成果が、計画からの移行についてはロシアと、伝統からの移行についてはインドと比較しながら中国「資本主義」を分析した加藤弘之『進化する中国の資本主義』（岩波書店、2009年）である。そのエッセンスは、次のような「中国資本主義の特性」を抽出したことである（①中央政府の市場への強い介入、②地域間、企業間、個人間での激しい競争が効率性と両立、③成長を促す、政府や組織の固有のインセンティブ・メカニズム）。

もう一つは、サルトリーが、「比較政治学の斬新さ、特異性、重要性は、できるだけ多くの事例に照らして仮説、一般命題、仮説・帰結方法則の有効性を体系的に分析することにある」と言うように（サルトリー「政治学における概念形成上の誤謬」1969）、比較はあくまで普遍性や概念化に近づくためのプロセス、手法だ、とする立場である。中国・ロシアの「体制移行のダイナミズム」比較を目指した最近の成果が、中兼和津次「経済体制移行期比較研究——社会主義はなぜ資本主義に向かって脱走するのか」（本シンポジウムペーパー）である。得られた結論、ある種の「一般則」は、「所有構造ではなく、市場化が経済体制の移行を決定づける」であり、唯物史観の想定とは違って、体制移行は、意思 → 市場化（メカニズム） → 所有（構造）というプロセスを辿る、というものである。

5. そもそも上記3つの地域大国（もしくは地域）は少なくとも以下のような共通の属性をもつ。1. 大きさ 領土・人口、2. 多民族・複合国家である、3. 帝国（植民地）の歴史をもつ、4. なんであれ「社会主義」の歴史をもつ。

また21世紀のいま、次のような共通の志向、オリエンテーションをもつと考えられる。1. 「脱社会主義」、2. 民主化の経験、民主化の圧力、3. 市場化と民営化、4. 地域大国化、である。そうした共通性を前提に、筆者がとくに関心を持つのは、次のようなメカニズムの比較研究である。*民族共生のメカニズム、*宗教と政治権力、*農村統治のメ

カニズム（共同体、農村リーダー、農村選挙）。

【表 三地域大国の通時的・総合的比較の試み】

		前社会主義段階	社会主義段階	後社会主義段階
農 村 共 同 体	ロシア	+	—	—
	中 国	+	—	+
	インド	+	+	+
エリート寡占体制	ロシア	+	+	+
	中 国	+	?	+
	インド	+	+	+
市 民 社 会	ロシア	+	+—	+
	中 国	?	—	+—
	インド	+?	+	+
複 合 的 統 合	ロシア	+	—	+
	中 国	+	—	—
	インド	+	+	+

表1は、ロシア・中国・インドを長いパースペクティブで、広い視野のもとに比較する筆者の思考マップである。筆者がロシア・中国・インドの比較を通じてなにか新しい知見を得たい分野、イシューとして、農村共同体、エリート体制、市民社会、諸民族の複合的統合などを考え、以上のような対比を試みた。また、それぞれの移行の「質」を区別し、あるいは特定するために、次のようなイシューやテーマもきわめて興味深い。

*市場化のもとでの国有企業—ロシア型・中国型・インド型、

*地域大国の統治形態の史的変容—帝国型支配、共和国型統治、ポスト社会主義型統治。

*土地公有制が限定する「資本主義」など。

本シンポジウムでは、ロシア・中国・インドの「村社会」、「宗教政治」、「社会的亀裂」を比較検証しようとしている。「比較」の効用を最大限発揮できる、大変興味深い議論となることだろう。大いに期待したい。

6. 凝集的なセッションにするために、司会者としては、とりあえずパネリストに以下の三つの問いかけをしておきたい。

①地域大国を取り上げる、地域大国で括ることの意味はなにか？ 共通性があるという暗黙の仮説があるのか？ あるいは地域大国間の紛争(たとえば中央アジアにおける

中ロ、南アジアにおける中印)を想定した上での枠組みか？

②比較の意味、比較の効用はなにか？ どういう比較がより効果的で合理的か？ 3
地域大国、4地域大国比較に何を期待するか？

③ロシアも中国もインドも、それ自体、「比較」や「相対化」に無縁の知的世界にある。
社会主義からの移行、あるいは市場化などについて、それぞれの国の研究者に比較の
視点は強くなっているのか。どのような研究成果が出ているのか。